

Some relations in universal enveloping algebras of three dimensional Lie algebras

筑波大学大学院数理物質科学研究科 村田駿祐 (Shunsuke MURATA)

1 はじめに

\mathbb{C} 上の 2 元生成の 3 次元リー代数 L を考える. 3 次元リー代数 L は derived ideal の次元と center が derived ideal に含まれるか否かにより, 次の 5 パターンに分類されていることが知られている [2].

(a) L は abelian

(b) L はハイゼンベルグ代数 (以下, \mathfrak{h} と書くことにする)

(c) $L = \mathbb{C}e \oplus \mathbb{C}f \oplus \mathbb{C}g$ s.t.

$$[e, f] = e \quad [e, g] = 0 \quad [f, g] = 0$$

(d) $L = \mathbb{C}e \oplus \mathbb{C}f \oplus \mathbb{C}g$ s.t.

$$[e, f] = 0 \quad [e, g] = e \quad [f, g] = \alpha f \quad (\text{d})-(\alpha)$$

$$[e, f] = 0 \quad [e, g] = e + f \quad [f, g] = f$$

ただし $\alpha \in \mathbb{C}^\times$ であり $\alpha\alpha' = 1$ となる α' は α によって決まるものと同型.

(e) 特殊線形リー代数 (以下 \mathfrak{sl}_2 と書くことにする)

上記の分類において 2 元生成にできないパターンは (a) 及び (d)-(α) の $\alpha = 1$ の 2 種類の場合のみで, 他は全て 2 元生成にできることが知られている [3]. 従って, この場合を除いて $L = \langle x, y \rangle$ (2 元生成) と仮定し, その包絡代数 $U(L)$ を考える. このとき, $U(L)$ における関係式は 2 元 x, y の積により表される. 本稿では, まずある種の関係式によって上記の分類に対する考察を行う. そして, この研究に関連して導かれた $U(\mathfrak{sl}_2)$ の新たな基底の決定を受けて, その q 類似である量子群 $U_q(\mathfrak{sl}_2)$ における新しい基底を求める.

以下が今回の私の結果である.

Main result

(i) L を 3 次元リー代数とする. いま, 関係式

$$(H) \begin{cases} yxy^k = \frac{k}{k+1}xy^{k+1} + \frac{1}{k}y^{k+1}x \\ y^kxy = \frac{1}{k+1}xy^{k+1} + \frac{1}{k+1}y^{k+1}x \end{cases}$$

を (H) 型と呼ぶことにすると次の事実が成り立つ.

- $L \cong \mathfrak{S} \iff$ (H) 型は任意の $x, y \in L$ s.t. $L = \langle x, y \rangle$ に対して成立する .
- $L \cong \mathfrak{sl}_2 \iff$ (H) 型を満たす $x, y \in L$ s.t. $L = \langle x, y \rangle$ は存在しない .
- $L \neq \mathfrak{S}, \mathfrak{sl}_2 \iff$ (H) 型を満たす $x, y \in L$ s.t. $L = \langle x, y \rangle$ が存在し ,
(H) 型を満たさない $x, y \in L$ s.t. $L = \langle x, y \rangle$ も存在する .

(ii) $U_q(\mathfrak{sl}_2)$ を \mathfrak{sl}_2 の量子群とする . このとき ,

$$U_q(\mathfrak{sl}_2) = \left(\bigoplus_{i \geq 0, j \geq k \geq 0} \mathbb{C} e^i f^j e^k \right) \oplus \left(\bigoplus_{i \geq 0, j \geq k \geq 0} \mathbb{C} e^i f^j e^k \right) t$$

が成立する .

□

2 3次元リー代数における関係式

2元生成の3次元リー代数 L の包絡代数 $U(L)$ において , 以下の事実が知られている [3] .

Fact 2.1. $L : \mathbb{C}$ 上3次元リー代数

$U(L) : L$ の包絡代数

$L = \langle x, y \rangle : 2$ 元生成と仮定

$U_k = \sum_{0 \leq m \leq k} (\mathbb{C} x y^m + \mathbb{C} y^m x + \mathbb{C} y^m)$ ($k \geq 0$) とする .

このとき , $U(L)$ において以下の式が成立する .

$$\begin{aligned} (A_k) \quad & y x y^k \equiv \frac{k}{k+1} x y^{k+1} + \frac{1}{k+1} y^{k+1} x \pmod{U_k} \\ (B_k) \quad & y^k x y \equiv \frac{1}{k+1} x y^{k+1} + \frac{k}{k+1} y^{k+1} x \pmod{U_k} \\ (C_k) \quad & y U_k \subseteq U_{k+1}, \quad U_k y \subseteq U_{k+1} \end{aligned}$$

□

Fact2.1 は3次元リー代数の包絡代数上で成立する関係式の枠組みを定めている . この関係式はリー代数の構造と生成元の選び方によって , 剰余項 U_k だけが変化する . L が \mathfrak{S} や \mathfrak{sl}_2 の場合には U_k の部分がそれぞれ定まっており , 次のようになることが知られている .

Fact 2.2. (i) $L = \mathfrak{S}$, すなわち

$$[p, q] = r, \quad [r, p] = 0, \quad [r, q] = 0$$

を満たすリー代数 $\mathfrak{S} = \mathbb{C}p \oplus \mathbb{C}q \oplus \mathbb{C}r$ とする . このとき

$$\begin{aligned} (A_k) \quad & q p q^k = \frac{k}{k+1} p q^{k+1} + \frac{1}{k+1} q^{k+1} p \\ (B_k) \quad & q^k p q = \frac{1}{k+1} p q^{k+1} + \frac{k}{k+1} q^{k+1} p \end{aligned}$$

が成立する .

(ii) $L = \mathfrak{sl}_2$, すなわち

$$[h, e] = 2e, \quad [h, f] = -2f, \quad [e, f] = h$$

を満たすリー代数 $\mathfrak{sl}_2 = \mathbb{C}e \oplus \mathbb{C}f \oplus \mathbb{C}h$ とする．このとき

$$(A_k) \quad fef^k = \frac{k}{k+1}ef^{k+1} + \frac{1}{k+1}f^{k+1}e + kf^k$$

$$(B_k) \quad f^k ef = \frac{1}{k+1}ef^{k+1} + \frac{k}{k+1}f^{k+1}e + kf^k$$

が成立する．

□

以下, Fact2.2 の (i) のような剰余項が 0 になる形の関係式を (H) 型と呼び, (ii) のような剰余項が kf^k となる形の関係式を (S) 型と呼ぶことにする．

さて, \mathfrak{sl}_2 や \mathfrak{sl}_2 においては剰余項 U_k の値を決めることができた．しかし, U_k の定義をいま一度見てみると, 剰余項 U_k はより複雑な値をとりうるということがわかる．実際, 一般には剰余項をコントロールすることさえ非常に難しい．しかし, 上の (H) 型や (S) 型の関係式によって, 前述のリー代数の分類に従った U_k による特徴付けを行うことができる．すなわち, 次の命題が成立する．

Proposition 2.3. L を 3 次元リー代数とし, L は 2 元生成であると仮定する．このとき,

(i) $L \cong \mathfrak{sl}_2$ ならば, $L = \langle x, y \rangle$ とするとき

$$(A_k) \quad yxy^k = \frac{k}{k+1}xy^{k+1} + \frac{1}{k+1}y^{k+1}x$$

$$(B_k) \quad y^k xy = \frac{1}{k+1}xy^{k+1} + \frac{k}{k+1}y^{k+1}x$$

を満たす元 $x, y \in L$ が存在する．

(ii) $L \cong \mathfrak{sl}_2$ ならば, $L = \langle x, y \rangle$ とするとき

$$(A_k) \quad yxy^k = \frac{k}{k+1}xy^{k+1} + \frac{1}{k+1}y^{k+1}x$$

$$(B_k) \quad y^k xy = \frac{1}{k+1}xy^{k+1} + \frac{k}{k+1}y^{k+1}x$$

を満たす元 $x, y \in L$ は存在しない．

□

Proposition 2.4. L を 3 次元リー代数とし, L は 2 元生成であると仮定する．このとき,

(i) $L \cong \mathfrak{sl}_2$ ならば, $L = \langle x, y \rangle$ を満たす全ての $x, y \in L$ に対して

$$(A_k) \quad yxy^k = \frac{k}{k+1}xy^{k+1} + \frac{1}{k+1}y^{k+1}x$$

$$(B_k) \quad y^k xy = \frac{1}{k+1}xy^{k+1} + \frac{k}{k+1}y^{k+1}x$$

が成立する．

(ii) $L = \langle x, y \rangle$ を満たす全ての $x, y \in L$ に対して

$$(A_k) \quad yxy^k = \frac{k}{k+1}xy^{k+1} + \frac{1}{k+1}y^{k+1}x$$

$$(B_k) \quad y^k xy = \frac{1}{k+1}xy^{k+1} + \frac{k}{k+1}y^{k+1}x$$

が成立するならば $L \cong \mathfrak{sl}_2$ となる .

□

上の命題より , L を 3 次元リー代数とし , $L = \langle x, y \rangle$ (2 元生成) と仮定するとき . 包絡代数における関係式は以下のようにまとめることができる .

L の種類	包絡代数における関係式
\mathfrak{sl}_2	(H) 型のみ実現可能
\mathfrak{sl}_2	(H) 型が実現不可能
その他の L	(H) 型が実現可能

□

L が \mathfrak{sl}_2 でも \mathfrak{sl}_2 でもない”その他の L ”における剰余項 U_k はコントロールすることさえ難しいと前述した . しかし , 多くの計算の結果 , (d)-(β) の場合において , 複雑ではあるがコントロールできる例を見つけることができた . これはちょうど x, y を取り替えると (H) 型が成立する例である . この例を以下に紹介する .

Proposition 2.5. $L = \mathbb{C}e \oplus \mathbb{C}f \oplus \mathbb{C}g$ を

$$[e, f] = 0, \quad [e, g] = e + f, \quad [f, g] = f$$

を満たすリー代数とする .

(i) $x = g, y = e$ とおくと次の (H) 型の式が成立する .

$$(A_k) \quad yxy^k = \frac{k}{k+1}xy^{k+1} + \frac{1}{k+1}y^{k+1}x$$

$$(B_k) \quad y^kxy = \frac{1}{k+1}xy^{k+1} + \frac{k}{k+1}y^{k+1}x$$

(ii) $x = e, y = g$ とおくと剰余項が 0 にならない次の式が成立する .

$$(A_k) \quad yxy^k = \frac{k}{k+1}xy^{k+1} + \frac{1}{k+1}y^{k+1}x - xy^k + \sum_{i=1}^k \frac{kC_i}{k-i+1}y^i x + \frac{1}{k+1}x$$

$$(B_k) \quad y^kxy = \frac{1}{k+1}xy^{k+1} + \frac{k}{k+1}y^{k+1}x + \sum_{i=1}^k \frac{(-1)^{k-i+1}kC_i}{k-i+1}xy^i + y^kx + \frac{(-1)^{k+1}}{k+1}x$$

□

3 \mathfrak{sl}_2 の量子群における基底の決定

さて , 3 次元リー代数 L において $L = \mathfrak{sl}_2$ または $L = \mathfrak{sl}_2$ の場合 , それぞれの包絡代数において

$$U(\mathfrak{sl}_2) = \sum_{i,j,k \geq 0} \mathbb{C}p^i q^j p^k$$

$$U(\mathfrak{sl}_2) = \sum_{i,j,k \geq 0} \mathbb{C}e^i f^j e^k$$

となることが知られている [3] . ここで , $j \geq k$ という条件を入れると , 上式はそれぞれ

$$\begin{aligned} U(\mathfrak{S}) &= \bigoplus_{i \geq 0, j \geq k \geq 0} \mathbb{C} p^i q^j p^k \\ U(\mathfrak{sl}_2) &= \bigoplus_{i \geq 0, j \geq k \geq 0} \mathbb{C} e^i f^j e^k \end{aligned} \quad (*)$$

となることが知られている [5] . 見て分かる通り , これらはそれぞれの包絡代数の PBW 基底とは異なる基底になっている .

ここで \mathfrak{sl}_2 の量子群を考える . \mathbb{C} を複素数体とする . $q \in \mathbb{C}^\times$ を 1 つ固定し , 任意の $m \in \mathbb{N}$ に対し , $q^m \neq 1$ とする . このとき , \mathfrak{sl}_2 の量子群は $e, f, t^{\pm 1}$ で生成され , 次の基本関係式を満たす \mathbb{C} 上の結合代数である .

$$t^{\pm 1} t^{\mp 1} = 1, \quad tet^{-1} = q^2 e, \quad tft^{-1} = q^{-2} f, \quad [e, f] = \frac{t - t^{-1}}{q - q^{-1}}.$$

いま , \mathfrak{sl}_2 の量子群を $U_q(\mathfrak{sl}_2)$ と書くとき , $U_q(\mathfrak{sl}_2)$ における (S) 型のような関係式が存在する . また , $U_q(\mathfrak{sl}_2)$ においても次の結果が知られている [4] .

$$U_q(\mathfrak{sl}_2) = \left(\sum_{i, j, k \geq 0} \mathbb{C} e^i f^j e^k \right) + \left(\sum_{i, j, k \geq 0} \mathbb{C} e^i f^j e^k \right) t$$

この結果を受けて , $U_q(\mathfrak{sl}_2)$ においても (*) の類似が得られないか考えた結果 , 上の式に $j \geq k$ という条件を入れることで , 次の結果を得ることができた .

Theorem 3.1. $U_q(\mathfrak{sl}_2)$ を \mathfrak{sl}_2 の量子群とする . このとき ,

$$U_q(\mathfrak{sl}_2) = \left(\bigoplus_{i \geq 0, j \geq k \geq 0} \mathbb{C} e^i f^j e^k \right) \oplus \left(\bigoplus_{i \geq 0, j \geq k \geq 0} \mathbb{C} e^i f^j e^k \right) t$$

が成立する .

□

References

- [1] 谷崎俊之 , リー代数と量子群 , 共立出版 , 現代数学の潮流 , 2002 年
- [2] N. Jacobson , *LIE ALGEBRAS* , Dover , 1962
- [3] S. Berman , J. Morita , Y. Yoshii , *Some Factorizations in Universal Enveloping Algebras of Three Dimensional Lie Algebras and Generalizations*, *Canad.Math.Bull.* Vol.45(4), 2002 pp.525-536
- [4] J. Morita , H. Sakaguchi , *Some Formulae in $U_q(\mathfrak{sl}_2)$ and Diagonalizability*, *Kyushu J.Math.* Vol.57, 2003 pp.165-173
- [5] H. Chiba , J. L. Guo , J. Morita , *A New Basis of $U(\mathfrak{sl}_2)$ and Heisenberg Analogue*, (preprint)
- [6] 村田駿祐 , 包絡代数における数式処理 , 修士論文 , 2007 年